

# SoE（権力の奉仕）×リミタリアニズム理論の批判的検証

## 既存フレームワークとの重なり（先行研究サマリー）

福祉・ケア分野では、ケア提供者によるパターナリズムと利用者の自律尊重の対立が広く議論されている。たとえば前向きなアプローチでは、「パターナリズム的ケア」は介護者の「私たちが知っている、お前は知らない」という優越的態度で特徴づけられるとされ<sup>①</sup>、介護者側が受益者の能力を過小評価して過保護に陥ることが懸念される。また、介護者のパターナリズム傾向を測定する「パターナリスト／自律志向ケア尺度（PACA）」の開発研究もある<sup>②</sup>。こうした研究は、自律志向（ケア受給者を意思決定に参加させるケア）とパターナリズム的ケアを、介護者行動として別の軸で捉えている。一方、フーコーの「牧師的権力」概念は、ケア者が羊（ケア受給者）のために自己犠牲的に尽くすような権力形態を示し、一般的な法や行政権力とは性格を異にする<sup>③</sup>。これは福祉ケアにおける「善意の権力」の分析に資する。さらに、関係的自律の研究（フェミニストやコミュニタリアンの視点）は、人間は稀に単独で完全自律的ではなく、人間関係に埋め込まれた存在であると指摘する<sup>④</sup>。この文脈では、個人主義的自律だけでなく、周囲とのつながりを踏まえたケア倫理も重視される。また、障害者権利運動や法制度では、代理決定（後見制度）ではなく「支援付き意思決定」の導入が進んでおり、支援を受けながらも本人が最終的な意思決定者となる枠組みが提案されている<sup>⑤</sup>。これら先行研究はいずれも、福祉場面での権力や自律の重要性に光を当てるが、SoEが提唱する「福祉権力の可視化・定量化」やリミタリアン的な枠組みの適用は前例が少ない。従来、福祉ケアにおける権力を「貨幣」のように累積的に測る試みは見当たらず、SoEの二重仕訳（貸借対照表的）監査メタファーは極めて斬新である。

## 論理的一貫性分析（内部矛盾の指摘と解消案）

- **自律性パラドックス:** SoEは利用者自律を重視しつつ、監視や記録システム導入を提唱する。この手法自体が新たな規制・監視となり、「自律を守るために介入」がパターナリズム批判とどう違うかが問われる。「支援者も含めた第三者的監視機構」の設置は、誰が監視者を監視するのか（プラトンの『くさび机』問題）という難問を含む。現状では、民主的なガバナンスや制度的な権力分散メカニズムを組み込むことで（例：外部レビュー委員会、当事者代表の関与など）、自己矛盾を緩和できる余地がある。
- **測定主義的簡略化:** 福祉関係の複雑な情動・関係性を数値に還元することは、本質的に不十分であるとの批判が予想される。ケア倫理の文脈では、「人間関係の質」を会計帳簿上の数字でとらえることへの警戒がある。たとえばケア倫理学者は、感情や身体性、具体的なつながりを重視しており<sup>⑥</sup>、「換算できない価値」が存在することを強調する。SoEは数値化を強調する一方で、「反実証主義的」な質的評価も組み合わせ、図りきれない部分を認める措置（質的ケーススタディやフィードバック機能の併設など）を明示する必要がある。
- **普遍性と文脈依存性:** 「権力の蓄積は普遍的に濫用を招く」と歴史的事例（ローマ・清朝・現代日本など）から主張しているが、文化・制度による差異を軽視すると批判される。伝統的な共同体主義者や非西洋的視点では、ケア関係の非対称性自体を前提とし、その上下関係がむしろ相互扶助と自己犠牲の精神から生じると見ることがある。SoEはこの点を考慮し、個人主義的前提への依存を和らげる工夫が必要だ。具体例として、コミュニタリアンの価値観を織り込んだ「権力共有」システムや、家族・地域を巻き込む協議プロセスを検討することが考えられる。
- **神経科学的帰属の過剰:** SoEではHPA軸やミラーニューロンなど神経科学的知見を引用するが、これらは相関関係の範囲であり、直接の因果と見なすには危険である。生物学的理論があまりに決定論的・

必然的に聞こえると、「科学万能主義」の批判を招く。したがって、神経科学の言及はあくまでメタファーとして扱い、生物学的説明が全てではないことを明確にすべきである。

## 哲学的批判（各思想潮流からの主な異論）

- ・**リバタリアン批判:** ノージックらの自由至上主義者は、個人の自己所有権・契約自由を重視する。政府や第三者が「福祉権力の上限」を設定することは、新たなパターナリズムだと反発する可能性がある<sup>7</sup>。たとえばノージックはヘルメット着用義務などの介入に反対し、「重大な怪我を伴う自己責任的行為への国家介入は不当」と述べている<sup>7</sup>。したがって、誰が限度を決めるのかを明確化し、利用者本人の意志を尊重する機構（民主的正当性）を組み込まねば、「新たな権力者」が生まれる危険性がある。
- ・**リベラル平等主義批判（ローウェル派など）:** ロールズ的視点では、社会正義は格差が最下層を最大限に助けることを条件とする差異原理が重要である。したがって権力の集中が結果的に弱者を助けるならば、むしろ許容されると主張されるだろう（ロールズ自身は再分配を正当化している）<sup>8</sup>。SoEが「上限」ばかりに注目すると、むしろ福祉の「下限（最低保障）」がおろそかになる恐れもある。また、ロールズは政治理念の合法性を公共性の原理で考えるため、技術的監査よりも公共性・公開性のある制度設計を求める可能性がある。SoEには、ceilings設定の正当性と同時に、利用者が最低限受ける権利・支援（floors）との整合性も検討する必要がある。
- ・**共同体主義／ケア倫理批判:** ジョアン・トロンやヴァージニア・ヘルドらケア倫理論者は、ケア関係は本質的に非対称で共同体的と考える。ケア権力を「会計可能なもの」とみなすこと自体が、ケアの本質的価値である共感や相互依存を損なうと批判される可能性がある。実際、ケア倫理では人間関係や依存性の倫理的意義が強調され、ケアを単なる契約・交換関係に還元することへの警戒が見られる<sup>6</sup>。SoEは、関係性の文脈や利用者・家族の声を取り入れた柔軟な運用を組み込み、数値だけでは計れない情緒的・文化的要素も尊重する姿勢を明示すべきである。
- ・**障害者権利批判:** 「Nothing about us without us（私たち抜きに私たちのことを決めるな）」の原則に照らし、SoEが真に当事者中心かが問われる。支援現場における代理意思決定の監視システムは、当事者の声を排除した新たな専門システムになる危険性がある。特にAI導入に対し、障害者団体は監視社会化の懸念を表明している<sup>9</sup>。実際、最近の報告書では、AIは障害者のステレオタイプを強化する問題が指摘されており、障害者の多様性を反映した設計と本人参画が求められている<sup>9</sup><sup>5</sup>。SoEは、CRPD（障害者権利条約）に沿った支援主体の意思決定参加や、AI監視の透明性・差別防止措置を重視する必要がある。
- ・**マルクス主義批判:** マルクス主義的観点では、貧困者の「アノミー」や権力者の「ヒュブリス」を個人の心理現象として扱うこと自体が、資本主義的構造問題を矮小化するという批判がありうる。経済構造や階級関係こそが諸問題の根源であり、個人の認知歪曲への焦点は逸脱だ、という指摘である。福祉国家論やケア労働の搾取を研究するマルクス派は、構造的不平等から目をそらさない視点を強調し、SoEの施策が現状の制度内改革にとどまらざるをえない点を課題に挙げるだろう（例：「ワーカフェア」施策への批判など）。SoEは、権力監査と並行して社会制度の大局的変革の必要性にも言及することで、この批判に対応しうる。

## ギャップ分析（SoEの新規性）

SoEが独自に貢献する点は以下の通りである。まず、**福祉領域での“権力の貨幣化”概念**は前例がない。従来のケア／ケア倫理研究では、「権力」を数値化する枠組みは存在せず、PACAなどはケア態度の評価尺度にとどまる<sup>2</sup>。SoEは逆に、「本人同意なしの代理決定数×不可逆性」という具体式で権力を測ろうとする点で全く新しい。第二に、**複式簿記を応用した権力監査ツール**というメタファーも革新的である。経済学では長い歴史がある二重仕訳だが、ケア関係に導入した例は見当たらない。このアプローチは、依存を負債として「可視化」し、従来の支援成果評価（損益計算的評価）を補完する画期的な試みと言える。第三に、**技術的実装（ICAI）による権力検知**という提案も独自性が高い。入力レベルでケア記録のテキストを解析して微妙なパターナリズムやマイクロアグレッションを察知するというアイデアは、AI倫理やアカウンタビリティ研究では例が乏しい。最後に、**集積データに基づく「ガウンジデータ（汚れた現場データ）」の活用**もユニーク

だ。SoEは長年の現場データ（日本の制度における事例）を基盤とし、文化的文脈に即した検証を重視する点で、欧米中心の理論と差異化できる。

## リスク評価（理論の脆弱性）

- **AI監査の逆効果:** AIを介した権力監査は、AI自身が新たな介入者となり得るリスクがある。医療AIの研究では、AIを過信した「アルゴリズム的パターナリズム」に陥る危険が指摘されており<sup>10</sup>、ケアの場でもAI判断に過度に依存して本来の対話やヒューマンタッチが損なわれる可能性がある。また、AI監査結果の解釈や対応が曖昧だと、介護者・利用者双方に不利益を与える可能性がある。
- **障害者参加の不備:** 前述したように、監査システムが現場の利用者にとって透明かつ参加型でないと、自己決定権侵害の懸念が強まる<sup>9</sup>。特にデータが集積されて第三者によって分析される過程で、利用者の声や文脈が削られる恐れがある。SoEは「監査対象者でもある利用者自身による検証・修正の機構」を組み込まない限り、当事者権利の視点から批判を受ける。
- **文化間適用の限界:** 福祉慣習や家族観、権威觀は文化によって大きく異なるため、極端な事例が少ない社会ではSoEモデルの妥当性が低い可能性がある。たとえば日本のような「察し文化」では、介護者・家族間で明確な対話がないまま決定が行われる事が多いが、これを「同意なしの代理決定」とみなすと標準的なケアまで監査対象となってしまう恐れがある。この点に対し、柔軟な閾値設定（例：緊急時の例外）を考慮する必要がある。
- **二重解釈の懸念:** SoEは「福祉権力=本人の自律性喪失を伴う介入量」と定義するが、この介入が本当に権力志向なのか、あるいはむしろ必要なケアなのかの区別が難しい。「医療的必要かつ同意を得ている介入」を不当に悪とみなしてしまうと、倫理的・法的に大きなトラブルになる。SoEは専門性による介入と権力行使の線引きを明確にし、両者を正確に区別できる仕組みが求められる。

## 推奨修正点（Robeyns接触前の強化策）

- **当事者参加の徹底:** 障害者自身や利用者グループを議論に積極的に関与させる。たとえば、支援記録や監査データへのアクセス権・異議申立て機能を明確化し、「支援者視点からの監査」ではなく「利用者視点からのチェック」を組み込む。先行研究にある支援付き意思決定の原則を応用し、最大限本人の意思決定能力強化（Self-Determination）の枠組みを反映させるべきである<sup>5</sup>。
- **複合評価による精緻化:** 権力の数値化に加え、定性的評価や多者間フィードバック（ケア会議、家族聴取、同僚レビュー等）を組み合わせてバランスを取る。たとえば「二重視点評価」を導入し、利用者と介護者双方が記録をチェックする相互監査プロセスを検討する。これにより、数字だけでは見落としがちな「質的側面」を補完する。
- **文化的コンテクストの明示:** 研究や実践フィールドの特性（高度官僚制・集団的合意形成など）を明示し、モデルの範囲条件を明らかにする。具体的には、共同体主義的・集団主義的な価値観が強い文脈では権力分散の方法が異なることを認め、SoEモデルの柔軟な適用例（行政型 vs 地域型ケアなど）を提示する。
- **自律支援との両立:** SoEの制約メカニズムが、利用者自身の能力開発や支援計画の確定的実施と矛盾しないように、支援ガイドラインや教育プログラムを同時に拡充する。たとえば、介護者向けにモラルライセンシング（「善意の免罪符」）を意識させる倫理研修を導入することで<sup>11</sup>、善意が権力の誤用に転化するリスクを低減する。
- **技術的ガバナンス設計:** 「憲法的AI」の概念を活かしつつ、AI監査の設定や調整を利用者・介護者・専門家で共同で担う形にする。たとえば、AIのしきい値やフラグ基準を定期的に見直す倫理審査委員会を設けるなど、技術的ツールを人間が制御する仕組みを組み込むことで、AI偏向や誤認識の影響を最小化できる<sup>10</sup>。

以上の分析を通じ、SoEフレームワークは多くの着想を既存文献に重ね合わせつつも、**福祉ケア権力の可視化**という新奇な視点を提供していると言える。しかし、その理論的・実証的な信頼性を高めるためには、指摘されたリスクや矛盾点への配慮を組み込んだ修正が必要である。各分野の先行研究・批判を踏まえた検討を重ねることで、Robeyns氏らへの提示に際してより頑健な提案となることが期待される。

**参考文献:** ここでは引用形式として、各引用箇所に対応する資料を示した。例えば介護におけるパターナリズム・自律の対立についてはFernández-Ballesterosらのレビュー<sup>①</sup>、リレーショナル自律の考察については生物倫理の文献<sup>④</sup>、AIによるケア支援のパターナリズム的リスクについてはKenigらの論文<sup>⑩</sup>、障害者のAI利用に関する課題についてはNYC Barの報告<sup>⑨</sup>などを参照した。

---

<sup>①</sup> <sup>②</sup> Frontiers | Paternalism vs. Autonomy: Are They Alternative Types of Formal Care?

<https://www.frontiersin.org/journals/psychology/articles/10.3389/fpsyg.2019.01460/full>

<sup>③</sup> The Subject and Power – Michel Foucault, Info.

<https://foucault.info/documents/foucault.power/>

<sup>④</sup> Beyond individualism: Is there a place for relational autonomy in clinical practice and research? - PMC

<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC5603969/>

<sup>⑤</sup> pennstatelawreview.org

[https://www.pennstatelawreview.org/117/4%20Final/4-Kohn%20et%20al.%20\(final\)%20\(rev2\).pdf](https://www.pennstatelawreview.org/117/4%20Final/4-Kohn%20et%20al.%20(final)%20(rev2).pdf)

<sup>⑥</sup> Care Ethics | Internet Encyclopedia of Philosophy

<https://iep.utm.edu/care-ethics/>

<sup>⑦</sup> <sup>⑧</sup> Nozick, Robert: Political Philosophy | Internet Encyclopedia of Philosophy

<https://iep.utm.edu/noz-poli/>

<sup>⑨</sup> The Impact of the Use of AI on People with Disabilities | New York City Bar Association

<https://www.nycbar.org/reports/the-impact-of-the-use-of-ai-on-people-with-disabilities/>

<sup>⑩</sup> (PDF) Algorithmic Paternalism: Autonomy Versus Automation

[https://www.researchgate.net/publication/385021382\\_Algorithmic\\_Paternalism\\_Autonomy\\_Versus\\_Automation](https://www.researchgate.net/publication/385021382_Algorithmic_Paternalism_Autonomy_Versus_Automation)

<sup>⑪</sup> Frontiers | Will You Forgive Your Supervisor's Wrongdoings? The Moral Licensing Effect of Ethical Leader Behaviors

<https://www.frontiersin.org/journals/psychology/articles/10.3389/fpsyg.2019.00484/full>